

なる愛好家とか趣味人でかたづけられない、人生をかけた壮絶なライフワークとなっていることに驚きを禁じ得ません。一般の研究者と比較して、その向いている方向がやや違っていますが、天文学ないしは人類の文化に対する貢献は同等であると考えるとよいでしょう。

今回は3人の方しか紹介できませんでしたが、まだまだ、多くの興味深い経歴・経験をお持ちの

“アマチュア”がいるはずで、出来るものなら、ほかの人達の様子も知る機会を作れないものかと思えます。

今回、このような企画で天文教育フォーラムで、快く講演していただき、且つお忙しいところ原稿を寄せていただいた皆さんには、フォーラム実行委員を代表して感謝の意を表したいと思います。

## □ 新天体の発見と天体発見賞・発見功労賞

山岡 均

2001年秋の年会の天文教育フォーラムでは、天体発見にまつわる話を集められました。最初に、日本天文学会が制定・授与している天体発見賞・天体発見功労賞について、簡単に紹介させていただきました。

### 1. 天体発見賞の歴史

日本天文学会が社団法人となったのは1935（昭和10）年1月です。それに伴って定款が定められたのですが、第5条には「本会は天文学の進歩および普及に特別の功労ありと認めたるものには総会の議決に依り其の功績を表彰することあるべし」とあります。これ以前の会則には表彰の字句はなく、業績を表彰する機運が高まっていたものと見られます。

そうしたところに、翌1936（昭和11）年の6月18日、五味一明氏がとかけ座に新星を発見、続いて7月17日には下保茂氏が彗星を発見されました。五味氏は長野在住で流星や変光星の観測を精力的に行なわれていた方で、北海道へ日食観測に遠征中の発見でした。一方、下保氏は当時東京天文台勤務で、変光星観測中に発見されたものです。この2つの発見を表彰するため、亡くなった学会会員間島道彦氏の御遺族から1924（大正13）年に学会が受けていた寄付金を使用することとなり、両者に書状と金一封が送られました。

これらの表彰が臨時総会で議決される直前の1936（昭和11）年10月4日、岡山在住の岡林滋樹氏がいて座に新星を発見されました。相次ぐ発見に対し、天体発見賞を制定することとなり、また服部玄三氏から天体発見奨励のためとする寄付をいただきました。この寄付を用いた賞は「天体発見服部賞」と称することとなり、細則が定められて岡林氏の表彰が行なわれるとともに、五味・下保両氏も加えた3名に賞牌（メダル）が送られました。これが最初の天体発見賞です\*\*。

以後65年ほどの間に、天体発見賞・天体発見功労賞を合わせて延べ200件に迫る表彰を行ってきました。学会事務局の御努力で、授賞一覧が天文学会名簿の巻末にまとめられています。最新の名簿ではじめてこの表が編集されたので、いくつか誤りや不統一などが見られますが、次回の名簿ではそれらを修正したいと考えています。

### 2. 天体発見賞に関する細則

前章で述べたように、天体発見賞・天体発見功労賞は、天文学会の細則に基づいて贈られています。

\* 原文は旧漢字旧カナ使い。

\*\* これらの経緯に関して、フォーラムでの講演および月報先号（第95巻1号56ページ）での報告には誤りがありました。これをもって訂正するとともに、関係者の皆様にお詫びいたします。

## 五味、下保兩氏の表彰について

既報の如く、蜆島新発見者五味一明氏及び下保彗星発見者下保茂氏の兩氏に對して本會より左記勳状を添へ金百圓づゝを贈呈した。この資金は故本會會員間島道彦氏逝去の際にその遺言により天文學の普及發達の爲に有意義に使用されたとして遺族より本會に委任されたものである。

拜啓 去る六月十八日北海道天鹽郡幌延に於ける貴下発見による蜆島新発見は同夜東京天文臺に入電ありたるも、郵便局の手落にて翌朝、十九日夜の觀測により確めたる上デンマーク天文電報中央局に打電の豫定なりし處、同日ニールゼン・ロレタ兩氏発見の報逆に同局より通知ありたる次第にて、東京天文臺よりは貴下発見の日時その他文書を以て不取敢中央局宛通知致しおきし由に御座候。然るところ其後中央局並にハーヴァード天文臺よりの報知により同新発見者は實に十數名の多きに及び候處、貴下の発見はその第一位に當れること確定致候。

時宛もヘルシン、オリンピック大會に於て新進邦人の活躍頗る見る可きものあるに際し天文學界にても同様華々しき國際的競技を見、貴下が勇躍第一位を勝ち得られしことは實に欣快此上なきことに有之、我等一同慶賀の念に堪えざる處に御座候。

天文學の進歩及び普及に特別の功勞ある者に對しては本會會則第五條により表彰し得るものに有之候へ共、本會創立以來未だ其の適用の機なく今日に及びたるものに候が、此度我等役員の間貴下表彰の案生じ去る九月二十五日評議員會を催して此の案を諮り候處滿場一致を以て可決、次いで十月二十四日臨時總會を催して同案提出、これ又滿場一致を以て出席會員の贊同を得、間島資金の中より金一百圓を貴下に贈呈致すことと議決相成候、右資金は故三井重役間島勇彦氏が、大正十三年その子息本會會員道彦氏を喪はれし際遺言に従ひ天文學進歩の資にとて本會に寄附されしものにて、これを貴下表彰の資となすことは寄附者側より又本會より見て最も當を得たるものと思惟仕り候、金額僅少なれども本會の微意御酌量の上御受納相成度懇願奉り候。

尙向後も益々御研鑽を積まれ、天文學進歩の爲御盡力賜り度く切に希望仕り候。右簡略ながら貴下表彰に至る経緯申上度如斯に御座候。敬具

昭和十一年十一月十四日

社團法人日本天文學會理事長 平山信

五味 一明 殿

天文月報 第30卷第2号 (昭和12年)

す。細則の本文は名簿などを参照していただくとして、ここではその概要を紹介します。

まず、天体発見賞と天体発見功勞賞の違いです。簡単に言えば、前者が第一発見者に、後者が独立発見者に贈られるものですが、後者は彗星の回帰の検出など、厳密な意味では発見ではない功績も対象としてきています。

次に、対象となる天体ですが、現在の細則では「新天体とは原則として、新星、超新星、彗星とする」となっています。1978年に浦田武氏が小惑星(2090)を発見され、以後数年は確定小惑星の発見も表彰していましたが、急増が予想されたためか1983年以降は表彰対象から外されています。日本人による確定小惑星の発見数は、現在では3000個を超えています。後述しますが、「原則として」とあるように、厳密にはこの3つの範疇に入らない天体の発見等に対しても、審議の上表彰することがあります。

授賞手続きは、天体発見賞選考委員会が毎年1月に、前年の功績を集約して評議員会に推薦し、審議された上決定されるようになっていきます。数年前の定款改訂以前は総会での議決が必要でしたが、改訂以後は評議員会で決定されることとなりました。授賞式は例年、春季年会時の総会でなわれています。

### 3. 発見天体の動向

賞の制定以来、2000年までの授賞について、天体の種類別に個数をまとめてみたのが表1です。これを参照しながら、65年間の天体発見の動向を見ていきたいと思います。

天体発見賞制定からの5年間は、初年の3つに加えて彗星が2つ発見・検出され、平均すると1年に1個の割合で発見されてきたこととなります。それに続く10年間は戦中戦後の混乱期にあたりますが、その間も天体発見のペースはそれほど落ち

表1 天体発見賞・天体発見功労賞の対象となった天体。

ひとつの天体に受賞者が複数いることもあるため、総計は授賞数とは一致しない。

発見年	天体発見賞			天体発見功労賞		
	彗星	新星	超新星	彗星	新星	超新星
1936-40	2	2	0	2c	0	0
41-50	4	0	0	0	2	0
51-60	1	0	0	2c	0	0
61-70	19	2	0	11	0	0
71-80	8a	9	0	4c	3	0
81-90	16b	10	5	6	2	1
91-00	13	19d	22	7ce	0	4

a: 小惑星 1 を含む    b: 小惑星 4 を含む    c: 検出等を含む    d: 特異天体等を含む    e: 分裂の検出等を含む

ず、逆に戦後復興期と言われる 1950 年代の発見が少ないのが目につきます。この時期は、本田實氏が精力的に彗星を発見された頃で、40 年代～50 年代の天体発見賞 5 件は、すべて本田氏の彗星発見でした。

1960 年代は本田氏の成功に刺激されて、池谷薫氏、関勉氏をはじめ数多くの彗星搜索者が活躍した時期です。一方で本田氏は次第に新星の搜索に活動の力点を移し、1970 年には 2 個の新星を発見されています。その後は、新星の発見が漸増していくとともに、80 年代以降、使用望遠鏡の大口径化と CCD の普及にともなって超新星が発見されるようになり、90 年代では急増しています。専門家による広視野サーベイによって、搜索者による彗星の発見数が減っているのではないとも言われますが、この表で見る限りでは特に目立った減少は見られないようです。

#### 4. 広範化する活動に対して

近年の天体搜索では、古典新星ではないが非常に珍しい天体が発見されることも多くなってきました。櫻井天体という名前が知られる、中質量の恒

星進化の最終段階であるヘリウムシェルフラッシュを起こした変光天体はその好例です。また、彗星核の分裂の検出などもいくつか報告されています。これらに対しては、天体発見賞・発見功労賞の規定をやや拡大解釈することによって表彰することとなり、これまでに数例の授与を行ってきました。

さらに、各種の天文関連の活動も盛んになって、「発見」という範疇には入らないけれども非常に意義深いものが多数見受けられるようになってきました。地道な太陽黒点や変光星の光度観測、また突発現象の検出と報告などがそれに当たります。これらの活動を賞賛し、また奨励するために、このたび天文学会では「天文功労賞」を制定し、表彰を行なうことになりました（月報 2001 年 12 月号参照）。2002 年春季年会では、初回の表彰として、長期にわたって多数の変光星の光度観測を続けてこられている成見博秋氏、突発流星群を検出・報告された薄謙一氏、や座 WZ の 23 年ぶりの増光を検出された大島誠人氏、見失われていた彗星を同定された村岡健治氏に贈呈しました。次年度以降につきましても、天文功労賞への会員の皆様からの候補者推薦を何卒お願いいたします。